

「アニマルセラピー」は本当に可能なのか？

帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科准教授
横山章光 (よこやま あきみつ)

Profile — 横山章光

産業医科大卒。共済立川病院，神奈川県大和市立病院，防衛医科大学校を経て2005年から現職。精神科医。専門は動物やロボットを医療に取り入れる研究。主な著書は、『アニマル・セラピーとは何か』（単著，NHK出版），『自閉症のある人のアニマルセラピー』（監訳，明石書店）など。



「ペット動物に癒される」ことに関して，疑問を挟む人のほうが少ないだろう。いわゆる「アニマルセラピー」は，長い歴史に基づいた，われわれの実体験を担保としている。もともと，われわれの周りには「何かの役割をもった」動物が配置されてきた。それは働かせるためだったり食べるためだったり，実利的な役割を担っていた。経済が安定していくにつれて，「愛玩」という役割の動物が登場してきた。それも立派な役割である。しかしそれは個人的なものであり，社会的に「動物をわれわれの医療や福祉に利用する」となると，話が違ってくる。そこにはもっと意図的なダイナミクスが必要となってくる。

1990年に私は医者になり，研修期間を経て精神科医となった。人間の心と臨床で触れ合っている途中に，「アニマルセラピー」と出会った。当時，この分野に関して研究・実践している人間側の研究者はほとんどいなかった。

「ペット動物に癒される」というわれわれの思いが共通していること，ペット産業が1兆円にも及ぶ巨大なものであること，そしてペットというものが生きて温かみがあり，やがて死ぬという人間と同じ生物としてのサイクルを踏むこと。これらのことから，この分野があまりに研究されていない

ことに私は驚きを感じ，誰かがやるしかない，と思った。もし，このときある程度の成書があれば，私はそれを一晩で読んで納得し，次の分野に手を伸ばしたかもしれない。しかしそういう成書がなかったのである。

1996年に，私は一般の臨床精神科医からみたアニマルセラピーの可能性を本にした。が，そのときから「アニマルセラピーを本当に日本でやるためには，まずその周辺部を埋めていくしかない」と考えた。

相手は生きている伴侶動物である。われわれは，その相手に対して何らかの心の動きを起こす。そこにはポジティブなものもあるが，ネガティブなものもある。それらを解明し，ある程度マッピングをしてから，やっと「セラピー」として能動的に，計画的に用いることが可能になる「かも」しれない，と私は考えた。それが，せめてもの（使わせていただく）相手に対する敬意である，と私は考えていた。そして丹念に「全て」を埋めていく作業を開始した。

私はそれを「人間動物関係学」と称したが，それは本当に幅広かった。そしてすべての精神疾患との関係もあった。たとえばペットに関する代理性ミュンヒハウゼン症候群の報告もあった。つまり，ペットを傷つけることで注目を意

図的に浴びようとするケースが報告されているのだ。動物の憑依も面白い観点だった。日本では狐憑きなどが少し前まで少なからず報告されている。しかし西洋ではそれは狼などへの変身など，形が違っていった。私は獣姦さえ追った。その専門家との対談で，動物に対する性的愛情と獣姦が異なることを知った。

細かいことを言いだせばきりがなが，アニマルセラピー研究の土台として，兎にも角にも次の柱をはっきりさせておくことが大切であると感じた。それは「ペットロス」「動物虐待」「子どもの発達に関わる動物」「日本人の動物観」である。15年追ってきて少し形が見えてきたので，現在の思いを端的に紹介していく。

ペットロス 日本ではペットを亡くしたときの飼い主の心の反応を「ペットロス」という言葉で使っている。確かにうつ状態にまでいく人もいる。しかし通常，ペットロスは重篤化しない。というのも，ペットというものはその死まで看取ることが飼うことの前提にあるからである。よく「子どもの死」と並ばれることはあるが，子どもの死とペットの死を並べるべきではない。ペットロスがこじれる場合は，何か他の原因がかぶさっていることが多い。

動物虐待 欧米の研究では，

「動物虐待」が「小児虐待」「DV」、そして最近では「高齢者虐待」ともリンクしていると考えられている。つまり、たとえば動物を虐待するような家では、その家で弱い子どもや高齢者も虐待されている可能性が高い、ということである。それぞれの福祉関係はそういう意味で発見や介入などに協力すべきである。

ただ、よくマスコミで流れるような「動物虐待していた者が、人間への暴力にエスカレートしていく」かどうかは微妙である。人間に対して暴力的行為を行う者が幼少期に動物虐待をしている可能性はあるが、動物虐待の行為自体が人間への暴力へと「発展」と考えないほうがよいようである。むしろこれはリトマス試験紙のようなもので、その時の暴力性を判断する以上には考えないほうが、現時点では正しい。

また、私はある程度の（たとえばアリを殺してしまうとか）動物虐待を子ども時代に「してしまう」ことは必要ではないか、とさえ考えている。それは好奇心の発展でもあり、ただ、それをしてしまったときに「決して楽しくない」「罪悪感」から、われわれはそこでそういう行動をストップするようになる。

子どもの発達に関わる動物 子どもの情緒教育に動物という言葉が使われることも多いが、われわれが思っているほど子どもは動物



子どもと動物の交流は微笑ましい。

に興味を示さない。むしろ子どもは子ども同士で遊ぶことを重視する。またその土台には母子関係が強く存在する。それらを前提として、動物との関係を考えることが、子どもの発達をより豊かにする可能性がある。また、子どもは興味から起こる瞬発力はあるが、時間経過が与える影響の理解は薄い。つまり動物飼育の際には子どもの瞬発性を埋める大人の協力（監督）が必須となる（それ抜きではペット飼育の「継続」は難しい）。動物飼育が人間への愛着発達につながるという証拠はない。逆に人間への愛着が高い子どもが動物への愛着も高いようである。

日本人の動物観 日本は農耕民族だったためか、動物に対する考え方が欧米と大きく異なる。特に肉食文化や犬や馬の使役文化が薄いため、野生動物も産業動物も愛玩動物も大きくひとくくりに考えてしまい、動物を区別化することを良しとしない。良しとしないが、現在の日本ではそれらの動物が存在しているという矛盾を抱えている。よって、愛玩動物福祉や野生動物保護などが同ラインで語られる。日本人の動物観はそれはそれで悪くはないが、本当に動物を「社会的に取り入れ使う」とするならば、その矛盾があることに直面化する必要がある。

これらの知見を考慮に入れ、今から真の「アニマルセラピー」を考えていこうとしているが、正直現在のところ私には迷いがある。それは、われわれの国が、それを取り入れるのに適しているかどうか自信がないのである。

たとえば、補助犬が広く使われている国では、

自分たちのペットもきちんと訓練していれば電車や公共の場所にも持って行けることが多い。そういう意味では、補助犬もペット犬も、同じ扱いである。しかし日本では、ペットと補助犬は全く交差しておらず、われわれは補助犬を、自分の家の犬の延長であるとはみなしていない。

私はこの10年ほど、ペットロボットを使ったセラピーも実践・観察してきた。「生きていないものを使って何ができるのか」と揶揄されたが、介入者がきちんとかわると、ペットロボット自体が非常に役に立つ場合もあることがわかってきた。

また、犬という動物は、あくまで「一人のボス」という飼い主を中心に生活しており、その関係性を保ったまま「セラピー」として現場に導入（他者への介入）をすることは、意外に難しいことも見えてきた（その点、多数の人を乗せる馬のほうがまだやりやすいかもしれない）。

世界を見渡すと、アニマルセラピーが行われている国は、そんなにエビデンスを重要視せず、意外なほど奥深く使っている。それは文化的に一緒に暮らしてきた長い歴史があるからである。そういう文化の補いがなしに動物を医療・福祉現場に取り入れるためには、やはり日本では何らかのエビデンスが必要となる。と同時に、われわれは意図的に、動物の地位の底上げを図らなくてはならない。社会で人間のために動物に何かの役割を担わすのであれば、それに応じた福祉やステータスが必須なのである。それらを切り離して動物を「使う」ことはできない。

アニマルセラピーとは、まさに「文化」そのものと密着しているのである。